

四季の喪失

市川浩

春はあけぼの、夏はよる、秋は夕暮、冬はつとめてとは、知らぬ人無き清少納言の枕草子冒頭の一節に現はるゝ四季の趣を表す時刻とて、日本に住む誰もが持つ四季の移り變りに對する感懐にてありき。然るにコロナに明け暮れたる今年先づ春は、櫻の開化早く、且つ早々と散り畢んぬ。花見客の罹患少かれとの神の思召しを感ずる人も多かるべし。然れど六月入梅となるや早くも夏空、連日猛暑續く。この夏は如何にと案ずる内に七月以降日本各地にて大雨頻りとなり、川の氾濫、土石流による家屋の損失など災害頻發す。八月は猛暑日意外に少く、九月に入るや残暑も秋晴れも少く、朝夕は寒さを覺ゆるほどなり。

かゝる異常氣象は今年限りなりや、將た又地球温暖化の結果なりや判然とせざるも、此までの氣候變化を通觀するに、問題の發端は三月頃より始りて六月の猛暑に至る暖冬ならざや。果して七月以降太平洋の海水温上昇著く、大氣中への水分増加せるにや、兎角雲は廣く且つ厚く、陽を仰ぐ少くて、寧ろ夏の暑さなかりき。來年も同様ならば事態は深刻と言はざるを得ず。

一方コロナ感染者は七月以降急増す。不思議なるは、それまで感染者の主體を占めたる高齢者がワクチン接種により激減せるに、感染者總數は却りて激増す。その主體は幼童を含む中高年齢者層と云々。この趨勢八月中も續き、病牀逼迫の事態となる。

最近の流行語たる科學的エビデンスとて、データ的には稀に見る明確なる事態の急變なれば、國の科學者を總動員して、この事象を徹底説明すべきに、何故か原因は新型デルタ株と推定してその後の進展は見られず。ならば、何故高齢者の感染少なきや、ワクチン接種率高き故なりとせば、中高年、弱年齢層のワクチン接種者にも感染多き理由や如何。恐らく風評の擴大を恐れ、様々の假説を逐一檢證中は沈黙すらむ。

思ひ出す戦後間もなく、戦時中の情報統制の反省とて、新聞各社は識者各々の意見を掲載せむとす。されど読者からの反応は結論が判らず、迷ふのみとて、結局自社及び自社の意見に同調の見解のみ掲載するに至れりとぞ。能く知るなけれど、SNSと稱する媒体にては不特定多数の意見の公表を受付け、一部ワクチン風評などあるも、自由に討論が可能とのことなり。風評を恐れざるも一計に非ずや。

更に深刻の問題あり。コロナ問題の初期、近所の薬局の前を通る度、「本日のマスク販売終了」の貼紙あり。即ちマスクを國産にて十分の供給し得ざりき。かの悪評高かりける「アベノマスク」も兔に角全國民に一律にマスク最低一枚を配布せずはあらじとの苦肉の策に非ずや。原発等もいざ稼働させねばとて果して外國の援助なしに可能なりや。今や國家の安全を擔保する自前の重要技術にての意外なる空洞化こそ監視すべけれ。更に氣候變動にて四季折々の景觀變化に感覺を研ぎ澄ます風習が消滅せば、日本人の文化的感受性を鈍化せしめ、惹いて世界の人々に伍して歩む能はざるに至るべし。

本稿完成直前、デルタ株による感染に就き、ワクチンの効果明らかとの研究發表あり。

(令和三年九月二十九日受附)